〔講演2〕

大隈重信とその周辺

五百旗頭　薫

こんにちは。五百旗頭薫と申します。大日方先生、本日はお招きいただき、ありがとうございます。

大隈を研究することを意識し始めたのは、一九九七年のことでした。無知だったから手を着けたのだと思います。いざ始めると、大日方先生に代表される重厚な先行研究に阻まれまして、大変苦労いたしました。「自由民権運動の中での大隈」という観点で研究しますと、板垣退助の自由党系が、やはり、ラディカルで目につきます。あるいは、安在邦夫先生が研究されているように、大隈系の中でも嚶鳴社といったグループがございましたが、そこが際立ってるように見えます。それから、大日方先生が研究なさったように、また、今日のシンポジウムのテーマでもありますが、小野梓に独自の魅力がございます。自分にできることがあんまりないのではないかということで、半年ほど足踏み致しましたが、少し視点を変えまして、戦前日本で政権交代可能な野党を作ったのが大隈重信なのである、「民権論という観点からは、減点される部分があるのかもしれないけれども、政権交代可能な野党を作ったのは大隈重信なのだ」と、そういう観点で研究をいたしまして、先ほどご紹介いただきました最初の本『大隈重信と政党政治―複数

政党制の起源　明治十四年―大正三年』（東京大学出版会、二〇〇三年）を書いた次第でございます。私が研究をし始めたのは、細川首相が政治改革などに着手して、非常に注目されていた時期でございますので、そういうことに影響を受けていたのかもしれません。

ご承知のとおり、一八八二年、前年に政府から追放されておりました大隈重信は、立憲改進党という政党を作っております。前の年に、板垣たちが自由党を作っておりますので、これが戦前の二大政党の基になったということでございます。

そして、私の考えでは、大隈の大きな功績は、この立憲改進党を通じて民力休養論を体系化した、という点にあると思います。そして、これが、富国強兵と対抗する思想として重要な対立軸になった、政治を活性化させた、というふうに考えております。民力休養論の主な内容というのは、「地租を減税しろ」ということでございます。当時の日本は、国家歳入の半分が地租でございます。残りの半分のまた半分、つまり四分の一ぐらいが酒税だったと思います。とにかく、この地租を大幅減税するということでございました。

ただ、大隈が偉いのは、ただ「地租を減らせ」と言っただけではないということでございます。今でも、「埋蔵金があるはずで、それを見付ければ財政が立ち直るはずだ」という議論は、よくございます。それで全ての問題を解決することは難しいと思います。大隈も、「地租の減税のためには、行財政整理だけではなくて、どこか他から財源を持ってくることが必要だ」ということを意識しておりました。大隈は、明治政府の初期の財政を担った人でございますから、そういう、どこかからかお金を取ってくるという知恵をいっぱい持っていたということが、重要だったと思います。そのために、例えば、「ちょっと怖いけど、外債を募集してもいいんじゃないか」とか、あるいは、日本は不平等条約を開国のときに結んでおりましたので、この条約を改正して、その不平等条約では関税の率が条約によっ

て固定されておりましたので、「これを改めて、関税を引き上げることで、地租減税の財源にすればいいじゃないか」といったような、歳入増加の具体的なアイディアを豊富に出したわけでございます。この地租減税論、少なくともその結論だけは普及いたしまして、これが、政府に対抗する政策スローガンになり、戦前の野党の出発点になったというふうに考えてよろしいかと思います。

ところが、その後、この大隈が自分の議論を変えなければいけない大きな出来事があったのでございます。それが日清戦争後、一八九七年の金本位制の導入でございました。大隈は、日本が金本位制を導入したことで大きく立場をかえました。金本位制というのは、いろんな国の通貨が金との間で、ある固定的な交換レートを設定するということでございます。貿易競争に負けて貿易収支が苦しくなっても、円を切り下げてその場をしのぐということができないということでございます。

大隈は、こうした状況を踏まえて、「これからは、金本位制のドクトリンに従った経済運営をすべきだ」というふうに議論し始めるわけでございます。つまり、国内の物価が高めであれば、為替レートが固定されていますので、すぐに貿易競争は不利になります。そうすると、対外的な支払が増え、日本が保有する金の残高が減ります。紙幣の発行が制約され、国内はデフレになる、不景気になるわけです。しかし、その痛みに耐えると、国際競争力が回復して、輸出拡大になる。そうすると、金が戻ってくる。そうすると、紙幣発行量が増えて、また景気が良くなる。景気が良くなりすぎるとインフレになって、また国際競争で不利になって、またデフレになって、インフレになって、という、「そういう景気循環のメカニズムに忠実に寄り添っていくというのが、長い目で見ると一番いいんだ」という議論をするようになるわけでございます。そうすると、どこか外からお金を取ってきて、不自然に金準備を膨張させるということは、経済の自浄作用を妨げる、一番まずいやり方ということになりますので、大隈は、かつて持っていた歳入

増加構想を自己抑制することになるわけであります。

少しこみいった話になりましたが、今申し上げたかったのは、戦前日本の野党といいましても、単一のアイデアからできていたわけではないということであります。一つのアイデアは、外からお金を取ってきて減税をするということ。もう一つは、外からお金を取ってこずに、金本位制のメカニズムの中で生きていくということであります。そして、日本の野党がなかなか育たずに苦労した大きな理由は、この二つの考え方を自分たちの中に抱え込んで、迷い続けたからだ、というふうに私は考えたわけでございます。

例えば、一八九八年に、大隈は総理大臣になりました。板垣と一緒に隈板内閣という、最初の政党内閣を作りました。政党政治にとっては重要な画期です。しかし、自分が政権を握ったからといって、すぐに思ったとおりの経済運営ができるわけではありませんでした。日清戦後経営の下でも反発の強い地租の増税を回避するためには、外債を募集するようなことも模索しました。しかもこの政権は数か月で潰れてしまいまして、とってかわった第二次山縣有朋内閣が、その年の暮れには地租の増税法案を出しました。大隈は行きがかり上、これに反対することになってしまい、しかも敗れました。このように、大隈は、歳入増加構想の自己抑制という、金本位制導入以後の考え方を一度は自己否定することになってしまいました。以後の大隈系政党というのは、長い混迷の時代を迎えることになります。

大隈たちが苦労したのは、私は、大隈個人の問題であると考えるよりは、金本位制という世界的な通貨システムに合わせた経済運営と、政党政治という、得票のためには人々になるべく痛みを意識させない政策を示そうとする政治のメカニズムとが、緊張をはらんでいたからだと考えました。その矛盾に対して、日本で取り組み、苦しんだのが大隈だというふうに考えまして、やはり大隈というのは非常に重要な役割を果たした政党指導者なんだろうというふうに考えたわけであります。

大隈系政党が低迷している間、政党政治の中心を占めていたのは自由党の後継たる政友会という政党でございました。しかし、一九一三年に、桂太郎という陸軍長州閥のリーダーが立憲同志会という新しい政党を作ります。桂は行財政改革を進めようと考えておりましたので、経済政策面では大隈と考えの合うところが多かったのでございます。大隈はこの立憲同志会を作ることを支持し、大隈系の政党政治家も多くここに参加いたします。ただ、かつての民力休養路線を引き継ぐ大隈系の政治家は、犬養毅を中心に立憲国民党という元々の政党に残り、この両者が反目するという状況になっていきます。しかし、立憲同志会は、その後育ちまして政友会と並ぶ二大政党になっていくわけでございます。

そして、一九一四年に、この立憲同志会を主な与党として第二次大隈内閣ができまして、いよいよ金本位制のドクトリンに従った経済運営ができる状況になりました。しかしながら、この年に第一次世界大戦が始まりまして、日本の商品は世界中で売れるようになった。大幅な輸出拡大と好景気に見舞われ、大隈の痛みを伴った経済改革は行われないままになってしまう。他の交戦国と同様に、金本位制からも離脱してしまいます。そして、第一次世界大戦下のバブルの時代に突入してしまうわけであります。

しかしながら、この間、長い間、言いにくいことを主張し、受け入れられにくいドクトリンを唱え続け、まがりなりにも野党の勢力を維持してきた大隈のリーダーシップというのは評価されるべきだろうと考えますし、バブルが終わった後の戦間期に、同志会の後継たる憲政会（後に立憲民政党）というのが、政友会と並ぶ、むしろ政友会よりも優位に立つ政党として、政党内閣の時代を実現していくということになるわけであります。

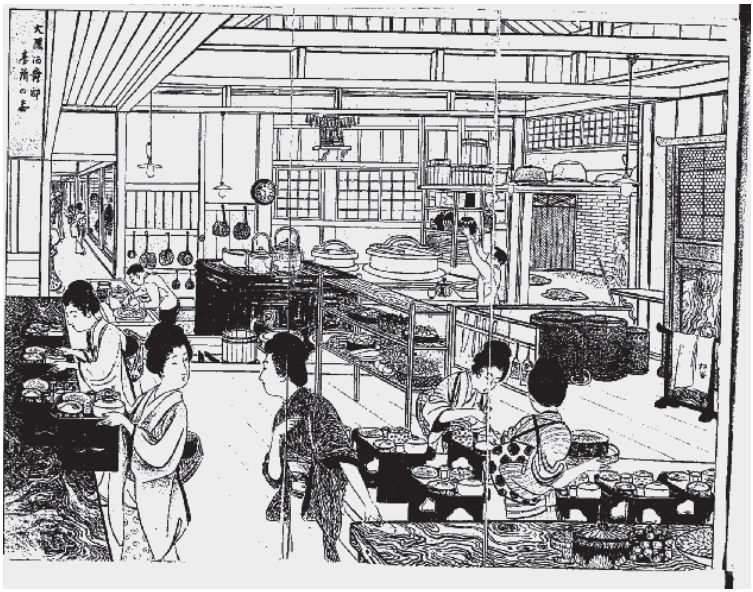
大変駆け足ではございましたが、戦前の野党の起源として、大隈がどういう役割を果たしたかというお話をさせていただきました。詳しくは、拙著をご覧頂ければと思います。

実は、そういう中で、私は、一つ違和感を持つことがございました。大隈が政党の指導者になった最初の数年は、大隈の周りにいっぱい補佐役がいるんですね。小野梓もそうですし、他にもいろんな人がいて、大隈本人よりも活躍して、自分たちの意見を訴えるわけです。しかし、大隈系政党の歴史をたどっていくと、だんだん、大隈以外の有力な指導者が少なくなっていて、大隈一人が新聞に出て、世論を喚起しているという印象が強まってきます。しかし、私はこれでは、政党としては心細いだろうと思いました。そこで、大隈が実際には、どういう人々と、どういうつながりを作っていたのか、どういうネットワークを作ろうとしていたのか、そういうことを研究したいと思うようになりました。その矢先、本日お招きをいただきまして、お話をする機会をいただいたわけでございます。「大隈重信とその周辺」という形でお話をさせていただこうと思ったのは、そのためでございます。

手始めに、大隈邸の台所の絵をお見せしたいと思います。母親の影響もありまして、大隈は大変お客好きの人でございました。その開放的な性格というのは、年とともに増していったわけでございます。大隈は、もともと人見知りの一面があり、政党を作った後も、人前でまともに演説ができない。壇に上がって二、三言しゃべると、赤くなって壇を降りるということすらあったそうでございます。しかし、人生の後半において、時代を代表する演説家に育ちました。

大隈の開放的な性格を示すのが、この台所でございます。一九〇二年に新築されたもので、村井弦斎〔二〇一三年現在放映のＮＨＫ連続テレビ小説「ごちそうさん」に登場する室井幸斎のモデルとなった人物〕という人の『食道楽』という本の中にございます。以前、渡辺浩先生（日本政治思想史）に、この本にこの絵があることを教えて頂きました。

広さは二五坪ほど、半ば板敷、半ばセメントの土間でございまして、和洋どちらの料理も作れます。毎日平均五〇人以上の食事を、ここで作っておりました。着席式なら二〇〇人、立食なら二、〇〇〇人でも対応できる台所でござ



村井弦斎『食道楽』春の巻（報知社、1903年）
国立国会図書館所蔵（近代デジタルライブラリー）

いました。ストーブや窯はガスを用いて、煙突もなく、鍋釜の底がすすで汚れる心配もないという、大変優れものの近代的なキッチンでございます。

収納を工夫しておりまして、ご覧いただくと、まきや炭を置いているところがないです。そもそもガスを使っているので、ほとんど要らないわけです。そういうまきや炭を置く場所を取られないというのも自慢でございました。人々が活き活きと能力を発揮するというのが大隈の理想でございまして、台所にもそれが反映されていると思います。

中央に棚がございますね。実はここが一番のぜいたくでございます。大隈は園芸の趣味がございまして、温室でキクやランを作っていたのは有名ですが、野菜も栽培できました。ですから、春先でもナスビができて、この中央の棚に置いていて、お客に出すというのが、ぜいたくだったわけ

でございます。

こういう大隈が社交家として非常に魅力的であったということは理解できます。しかしながら、この台所、この家から一歩出て、具体的に地方の人々とどういうネットワークを作っていたのか。そういうことを考えなければ、やっぱり政党指導者としての大隈ということを、十分理解ができたとは言えないだろうと思うわけでございます。

ここからが苦しいところでございまして、まだまだ勉強し始めたばかりでございます。各地の大隈系政党についての史料を読み通すのは大変な時間がかかりますので、まずは数字の助けを借りて大まかな見通しを付けようと思い付きました。『議会制度百年史』などを用いて、議会の閉会や解散、総選挙といった節目ごとに代議士の所属会派を数えました。

まず、その時々の衆議院の全議席に占める大隈系政党の議席占有率を計算し、そのあと、各府県ごとに割り当てられた議席に占めるその府県の大隈系の代議士の比率というのを出しました。府県における比率の方が全国的な比率より大きければ、その府県では大隈系政党は相対的に頑張ってるということになります。小さければ、頑張れていないということになります。こういう表を作れば、どの府県が、どの時期に大隈系のいわばドル箱であったかということが、何となく視覚化されます。

そのパターンを、四つ前後の類型に分けてみました。第一は、民力休養型です。これは、さきほどお話した前期の大隈系の理念に忠実に、「地租の増税は避けるべきだ、できれば減税したい」という考えでございます。一八九八年から翌年にかけての地租増徴反対闘争の後も大隈系が強く、立憲同志会結成後も、立憲国民党という少数会派に比較的多くの代議士が残った地域ということになります。岡山県や滋賀県がこれに当ります。

第二は、金本位制型です。「いやいや、そんな、どこかからお金を取ってきて減税とか、そんな甘いことを言ってちゃ

いかん」という考えでございます。地租増徴反対闘争の後に大隈系が弱まり、立憲同志会ができると同志会が強くなる地域です。神奈川県や愛知県です。

第三は忠誠型でして、地租増徴反対闘争の後も大隈系が強く、立憲同志会ができればそちらについていくという地域です。「何があろうと大隈についていく」という意味で、民力休養型と金本位制型の合体版ということになるでしょうか。新潟県・埼玉県・栃木県・宮城県・福島県・岩手県・富山県・福岡県・大分県・佐賀県などがそうです。

第四は分裂型でして、大隈系が強いけれども立憲同志会結成時に同志会と国民党に代議士が大きく割れる地域ということです。民力休養型と金本位制型の混合形態ということになるでしょうか。東京府・兵庫県・千葉県・茨城県・奈良県・静岡県・山形県・秋田県などです。

第五は挫折型でして、地租増徴反対闘争の後は党勢が振るわなくなる地域です。徳島県や香川県でしょうか。

こうした分類は府県ごとの内情を考慮にいれない機械的なものでして、何かを証明するというよりは、たくさんの府県があって途方に暮れる中で、どこから勉強するかを決めるための怠け者のやり方です。あまり真似はされず、かつ温かい目で見守って頂ければと存じます。

民力休養型については、岡山県が突出しています。犬養毅という有力政治家が頑張っていたという、属人的な要素が強すぎるように思いますので、今回立入った言及はしないことにします。

神奈川県や愛知県が金本位制型というのは、大都市を抱えていて、地租の減税とか増税反対というよりは、金本位制下の経済運営を考えるということで、直感的には納得できる気がいたします。

神奈川県の方は、これも島田三郎という有名な大隈系政治家がいて、属人的な要素が強いと思うので、今日は愛知県の話をしておきたいと思います。

愛知県は、やはり名古屋があるということで、実業家の力が強かったようでございます。そして、民力休養路線への反応はあまりよくなかったようでございます。大隈系の政党の演説が盛り上がった一八九三年の様子を見てみますと、島田三郎とか尾崎行雄が来て、「満堂、大いに盛り上がる」という記録がございます。しかし、その後、島田と尾崎は、取引所同盟の会員や薬剤師・古物商が催す宴会に行ってしまったようでございます。「そこの出席者六七名は、みんな有為の実業家ばかり。取引所や鉄道のことについて話し合った」というふうに、改進党の機関紙には書いてあります。しかし、実業家はあまり政党活動には熱心ではありませんので、政党活動をする人々の中では自由党の人気が強いという状態でございました。

そういう中で、頑張って大隈系を支えていたのは、大口喜六という、後に政友会に移りますが昭和期までずっと活動した政治家でございます。彼などは、「やっぱり増税反対だ」、あるいは、「できれば減税したい」ということで、前期大隈系の減税要求・増税反対に忠実なタイプでございました。

また、一九〇八年から民声倶楽部というのができて、愛知県の中で政友会に対抗するようになります。指導者として鈴置倉次郎という人がいましたけども、彼は、「とにかく海外からお金を取ってくるんだ。保護貿易主義でやっていくんだ」と論ずる政策通でございまして、これも前期大隈系の歳入増加構想を引き継いでる人に見えます。ですから、愛知県は金本位制型の県とはいっても、大隈系リーダーの主張という次元では、金本位制型には見えない気がいたします。そうすると、大隈の偉さというのは、自分の考えを地方に押しつけなかったことなのかな、という気がするわけでございます。やがて愛知出身の加藤高明が同志会の総裁として登場し、この県は同志会・憲政会の地盤となっていきます。

そこで、最後に、忠誠型ということで新潟県を取り上げ、同じことが言えるかどうかを考えてみたいと思います。

この県は、元々、大隈系政党が非常に強かったところでございます。早稲田を作るうえで活躍した市島謙吉なども新潟の出身者でございました。それだけに、しかも米どころでございますので、民力休養論の強いところでした。一九〇一年に大隈が地租の増税を認めるような発言をすると、新潟県選出の代議士を中心として、大隈系政党（当時は憲政本党）が分裂してしまいます。三四倶楽部といったクラブ組織を作って、分派行動に出てしまいました。

その後、大隈がどう対応したかという話をしたいと思います。その年のうちに、大隈は新潟県を旅しました。名目は、東京専門学校（今の早稲田大学）の資金を集めるための遊説ということでございました。現地では、三四倶楽部に行ってしまった、つまり脱党してしまった代議士も大隈を歓迎いたしました。「〔大隈〕伯は〔中略〕経済財政に関する一場の演説を為せしが脱党代議士の室孝次郎氏以下斡旋頗る努むる処ありき室氏は高田に於ける門閥家にして町民は呼ぶに先生を以てし徳望隆々たれば空前の盛会を呈せしも氏が斡旋の効多きに居りしならん」といった記事がございます（「大隈伯の越後入り」『東京朝日新聞』一九〇一年五月二九日）。三四倶楽部を自分につなぎとめたいという大隈の意識が、きっとあったはずです。

ただ、このときの大隈の遊説でもっと重要だったポイントは、実は、新潟県の長岡を中心とした石油産業の合同問題への対応でした。長岡周辺は、日本に珍しく石油の採れるところですが、それだけに採掘会社が乱立しておりました。そのうちに、アメリカのスタンダード石油のような海外の大資本も上陸しようとする、そういう情勢だったわけでございます。大隈は現地に行って合同を訴えまして、その影響があって、第一次合同というのが実現したというふうに言われております。

ではここで大隈は、自分の政治的なネットワークを使って合同を実現したのかというと、必ずしもそうではないように思います。以前、現地の石油会社の役員のリストをデータ化して、そのうち誰が大隈系と言えるか一通り調べた

ことがございます。その結論として言えるのは、大隈系の役員というのは確かに多いのですが、一番大隈系の影響が強かったのは、政治的には日本石油だったはずでございます。山口権三郎、これは大隈系で県会議長をやった人ですね。あと、内藤久寛、これは大隈系の代議士だった人です。彼らは、この第一次合同に参加しません。川上淳一朗とか中野貫一とか、やはり大隈系代議士になっていく人も参加しませんでした。この合同の中心になったのは宝田石油という会社でございまして、あまり大隈とは縁のない人たちでございました。

このとき大隈が言ったのは、「石油の採掘を一本化することよりも、鉄管会社や製油所をちゃんと一本化することが大事だ」ということでした。「スタンダード石油は、採掘の現場を押さえるよりも、まず油を送る鉄管とか、あるいは、送った先の製油所といった部分をまず押さえて、そこから採掘所を締め上げてくるはずだ。だから、そういうところも網羅した、大きな合同を作らなければいけないんだ」というふうに言いました。これに宝田石油が応じて、鉄管会社を網羅した第一次合同が実現するということでございます（拙稿「大隈重信について」『長岡商工人　百年の軌跡』（長岡商工会議所編刊、二〇一一年）。

その後、三四倶楽部の「新潟組」が、憲政本党への復帰を主張し、新潟県は再び大隈系が相対的に強い地域にもどっていきます。

大隈は、自分の命令で何か「こうしろ」というふうに言うわけではない。そういうことを強制するほどの力がないことも、分かっているわけでございます。むしろ、地元の状況をよく見て、地元にとってベストなことが何であるかということを、比較的に虚心坦懐（きょしんたんかい）に助言するということが多かったのではないかと思います。そういうことを繰り返す中で、深刻な内紛をなるべく先送りにしながら、徐々に大隈が考える金本位制のドクトリンに従った経済運営を認める野党というのができてきたのではないか、というふうに思うわけでございます。だから路線

転換がなかなか徹底しないのだ、という批判も成り立つでしょう。一方で、捨てがたいメリットも感じます。

政党政治というのは、最後は全国レベルの議席数で強弱を決める考え方でございます。それでも、少なくとも戦前には、それなりの自立性を持つ重要な地方が合わさって日本ができているという意識があったと思います。そういう意識の中で大隈も活動していました。このような、相手にフリーハンドを認めるという考え方は、不安定な基盤の上で野党を作るうえでも、そして、大学を経営するうえでも、とても重要な考え方だったのではないかと思います。私はそういう点で、最も大隈に敬意を表するものでございまして、本日は、そういうお話をさせていただきました。どうもありがとうございます。